

そうとしか生きられなかった夭折の歌人 ～石川啄木を偲ぶ

仙台市若林図書館
村上 佳子



昨年末、井上ひさしの芝居「泣き虫なまいき石川啄木」を観る機会を得ました。初演は1986年、その後の再演からも24年を経ての上演で、初めて観る舞台をかねてより楽しみにしていました。

はたらけど
はたらけど猶わが生活（くらし）楽
にならざり
ちつと手を見る

最もよく知られる啄木のこの歌について、井上ひさしの言葉を少し引用してみます。

——「一所懸命生きているのに、なぜ生活が楽にならないのだろう…」と思った経験のある人、あるいはいまそう思っている人たちは世の中に無数にいます。（中略）啄木がこの歌を詠まなかったら、世の中の多くの人が生活に困って途方に暮れた時、「ちつと手を見る」ことができなかったのではないか、と思うのです。——

（仙台文学館展示図録『石川啄木の世界～うたの原郷をたずねて』より）

石川啄木（1886年～1912年）は、僧侶である父が寺の住職を勤める岩手県浪民村に育ちます。一家の長男として母の愛を一身に受け、神童の誉れ高く少年期をその地で過ごした啄木は、やがて名門の盛岡中学校への進学をはたします。128名中10番の好成績で入学した早熟の少年は、この中学時代に文学に目覚め、後の妻となる節子との恋愛も進展しますが、やがて校内のストライキやカンニン

グ事件などにより退学。文学で生きていく決意のもとに上京したのは、啄木16歳の時でした。

そこから肺結核で亡くなるまでの10年間は、そうとしか生きられない一人の若き文学者の壮絶な人生であったと思います。

19歳、詩集『あこがれ』を出版するもその後は思い通りにいかず、結婚を機に帰郷。途中、仙台の土井晩翠宅に立ち寄り借金、数日間大泉旅館にて遊興、自らの結婚式に欠席。翌年には父の失職により一家の生活を担うことになり、故郷の小学校で代用教員を勤める。

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな



盛岡市内に残る「啄木新婚の家」

21歳、北海道へ渡り、函館、小樽、釧路を転々としながらも各地で新聞社に勤め、文章を書き続ける。各社ではそれなりの待遇で活躍し、釧路では馴染みの芸者とも親しむ。

その膝に枕しつつも
我がこころ
思ひしはみな我のことなり

22歳、妻子を函館の友人に託して、「文学的運命を極度まで試験する」決意を持って再度上京。小説はうまくいかず苦悩を短歌にまぎらわす。

こころよく
 我にはたらく仕事あれ
 それを仕遂げて死なむと思ふ

23歳、朝日新聞社に職を得て妻子を東京に迎えるが、暮らしは常に困窮。母と妻の確執が続く。

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
 花を買ひ来て
 妻としたしむ

24歳、朝日歌壇の選者を任される。長男が生後24日で死去。歌集『一握の砂』出版。大逆事件、日韓併合を知り、社会主義思想に関心を高める。

地図の上
 朝鮮国にくろぐると
 墨をぬりつつ秋風を聴く

25歳、慢性腹膜炎で入院し朝日新聞社は病休、以後出社することは無く給料の前借が続く。妻と母も肺を病む。

呼吸（いき）すれば、
 胸の中にて鳴る音あり。
 凧よりもさびしきその音！

26歳、母が肺結核で死去、3ヶ月後に啄木も同病で死去。歌集『悲しき玩具』出版。翌年には妻の節子も肺結核で死去。二人の娘が残される。

眼閉づれど、
 心にうかぶ何もなし。
 さびしくも、また、眼をあけるかな。

「泣き虫なまいき石川啄木」で描かれる啄木の晩年は、自他ともにその才能を

信じつつも、借金、質入れを繰り返す暮らしに困窮する毎日で、そこには常に家族を悩ませ、家族に悩ませられながらもペンを持ち書き続ける啄木と、それを支える友人の姿がありました。前借した給料や原稿料を一晩で使ってしまうような人物像に呆れ、家族の不幸を憐れむ向きもありますが、残された言葉の数々は今も私たちの心に響き、歌謡曲の一節につながるような表現も見られます。井上ひさしは「啄木の歌が日本人の心の索引になっている」と啄木に心惹かれる思いを表現しています。

東京より南に行くことは無かった啄木はやはり東北の人、上野駅のホームに建つ碑には誰もが知る歌が刻まれています。

ふるさとの訛なつかし
 停車場の人ごみの中に
 そを聴きにゆく



上野駅ホームの歌碑

芝居の後半、夜泣きそばの屋台を呼んで天ぷらそばやおかめそばを注文しようとするユーモラスな場面があります。ふと啄木のふるさと盛岡名物のわんこそばが頭に浮かび、駅ビル内の老舗で60杯を平らげたことを思い出しました。